「いき」2021 年 4 月号　No.117

おれもひとりの修羅なのか

牧師　山本 護

昨年の夏、子供たちのにぎやかな声と共に作り始められ、途中で止まっているツリーハウス計画。それから未完のハウスは、伝道所の冬ざれた林の端でポツンとたたずんでいた。春になり、足許に咲いたレンギョウと友達になっても、ツリーハウスはどことなくさみしそう。『春と修羅(宮沢賢治)』の一節をつぶやいてみた。

「心象のはひいろはがねから／あけびのつるはくもにからまり／のばらのやぶや腐食の湿地／いちめんのいちめんの諂曲(ﾃﾝｺﾞｸ)模様／(正午の管楽よりもしげく　琥珀のかけらがそそぐとき)／いかりのにがさまた青さ／四月の気層のひかりの底を／唾(ﾂﾊﾞｷ)し　はぎしりゆききする／おれはひとりの修羅なのだ」。

修羅とは善と悪が、己が内で相剋している状態、つまり阿修羅。それが擬人化されると、奈良興福寺の阿修羅像のように絶妙な三面六臂になる。旧約聖書にもこれと似た神名「アシェラ」が数カ所に記されています。阿修羅が仏教以前のインド古層に由来するように、アシェラもヘブライ文化成立以前のメソポタミアあたりに起源があるらしい。

「ユダの罪は心の板に、祭壇の角に鉄のペンで書きつけられ、ダイヤモンドのたがねで刻み込まれて子孫に銘記させるものとなる。それらは彼らの祭壇であり、アシェラ像である。それらはどの緑の木の下にも、高い丘、野の山の上にもある(ｴﾚﾐﾔ 17:1～2)」。

アシェラは異端として否定的に見られていますが、豊饒な自然神であることが預言書からも分かります。宮沢賢治が「おれはひとりの修羅なのだ」と「唾し　はぎしりゆききする」のも、春の豊饒さによって混乱させられているからでしょうか。

それにしても賢治ほどの感受力、羨ましくもあり、大変だったろうと同情もし、自分の鈍感にホッとなります。レンギョウと語り合うツリーハウスのように春は嬉しく、ゆえにいっそうさみしく、修羅にあるごとく感情が掻き混ぜられます。なにしろ善と悪が相克するほど命のダイナミズムが現れるのですから。

阿修羅とアシェラ、古代の神話伝承としてペルシャあたりでつながりそうですが学術的な論拠はありません。とはいえ、古サンスクリット語で「asu」は息や命の謂なので、「四月の気層のひかりの底」においては豊穣なアシェラと通底している気もします。

「おれもひとりの修羅なのか」。春の息吹は圧倒的で、異端に敏感なキリスト者が「唾しはぎしりゆききする」ほど、数多の命が地上に吹き出します。悪も、善も。Ω